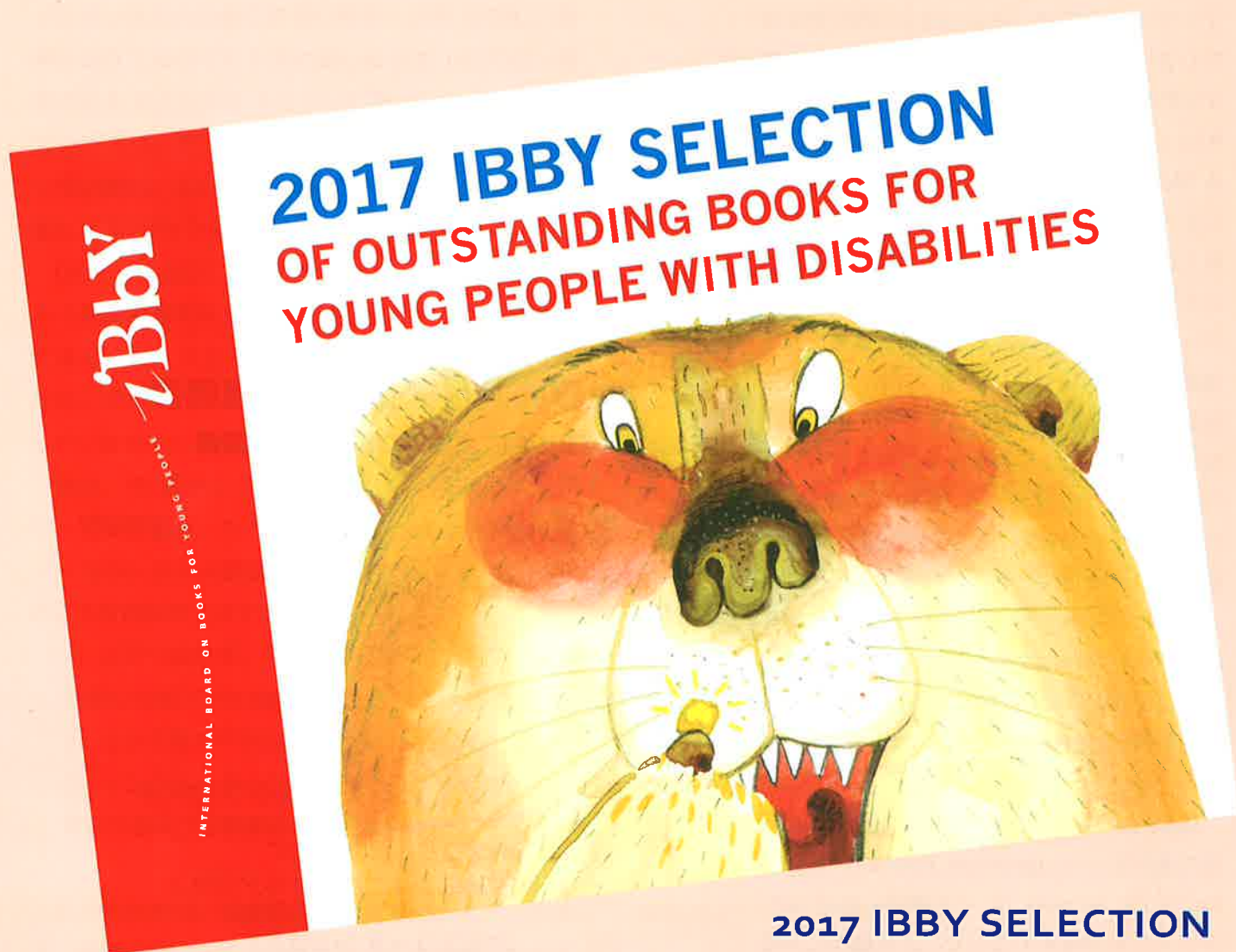


世界のバリアフリー児童図書

— IBBY (国際児童図書評議会) による 2017 年 選定図書 —



2017 IBBY SELECTION
of Outstanding Books
for Young People with Disabilities

IBBY

一般社団法人 日本国際児童図書評議会

IBBY と JBBY

IBBY (国際児童図書評議会 = International Board on Books for Young People) は、「子どもたちに必要なのはパンと本である。本を通して国際理解を深めることが平和を築く」と提唱したユダヤ人女性、イエラ・レップマンによって、1953年に誕生しました。2017年現在、75の国と地域が加盟し、世界中で子どもと本をつなぐ活動を行っている非営利組織です。隔年で行われるIBBY世界大会では、すぐれた作品を発表した作家と画家に対して「国際アンデルセン賞」を授与しています。また、世界の子どもの本に関する情報を掲載する機関紙「ブックバード」の発行や、成功した読書推進・識字運動の事例を世界に広める「IBBY朝日国際児童図書普及賞」の授与、まだ本に馴染みのない地域で本づくりや本を手渡す人を育てる「IBBY山田プログラム」、障害児の読書を普及させるための資料センターの活動、緊急支援を必要とする子どもたちに本を届ける「チルドレン・イン・クライシス」など、世界中の子どもたちが本を読む権利を得て、すぐれた本に出会い、国際理解と平和が達成されることを願っています。

IBBYの日本支部であるJBBY(日本国際児童図書評議会 = Japanese Board on Books for Young People)は、この理念にもとづき、子どもと世界を本でつなぐことを使命に活動を続けています。

www.ibby.org
www.jbby.org

世界のバリアフリー児童図書 —IBBYによる2017年選定図書—

もくじ

02	IBBY と JBBY
03	はじめに
04	このカタログの使い方
06	カテゴリー I "FOR" 配慮：スペシャルアプローチ
12	カテゴリー II "WITH" 共に：ユニバーサルアクセス
20	カテゴリー III "ABOUT" 理解：ポートレート
33	出版社一覧
35	国別一覧

はじめに

IBBY(国際児童図書評議会)は、障害のある子どもたちも豊かな読書体験ができるよう、2年に一度、各国で刊行されている児童書の中から、障害のある子どもや若者のために特別に作られた本(FOR)、障害があってもなくても共に楽しめる本(WITH)、障害のある子どもや若者について描いた本(ABOUT)のカテゴリーで、特に優れた良書を選び出し、紹介しています。このカタログには、2017年にIBBYが選んだ50タイトルの本を掲載してあります。

IBBYのこのプロジェクトは、1981年の国連による「国際障害者年」を機にはじまりました。特別な配慮を必要とする子どものために制作された本が、社会に認知され、より多く刊行されることを目的にしています。

現在、40言語以上にわたる約4千冊のバリアフリー児童図書が、カナダのトロント市立図書館分館ノースヨーク中央図書館に所蔵されています。以下のような作品が主体です。

- 1) 点字や絵文字、手話などをテキストに加えた、特別な仕様で制作された本
- 2) さわる絵本や布絵本(手作り本も含む)
- 3) インクルージョンや障害に対する理解の手助けになるような配慮のある絵本や物語

これらの本は、図書館内で閲覧することができます。さらに2015年からは、より多くの要望に応えるため、トロント市立図書館が、貸し出しや図書館間相互貸借用に副本の購入もはじめました。どんな本があるかは下記の方法で調べることができます。

- 1) IBBY ウェブサイトでカタログを閲覧する。
www.ibby.org または
www.torontopubliclibrary.ca/ibby

- 2) eメールで問い合わせる
ibby@torontopubliclibrary.ca
- 3) 電話で問い合わせる
++1 416 395 56 30
- 4) 図書館へ行く
North York Central Library branch of
Tronto Public Library (TPL)
5120 Yonge St. Toronto ON Canada

カタログ発行にあたり、多くの方から多大なるご協力をいただきました。IBBY支部が、それぞれの国で刊行された良書を見つけてくださったことに感謝します。各支部が作品を探し、読み、評価した結果、本カタログに掲載するのにふさわしい作品を推薦してくださいました。本を寄贈してくださった出版社にも深く感謝申し上げます。

世界中から集まった本を読んで、1冊ずつ解説を書いてくださったボランティアのみなさんにも心から感謝申し上げます。その多くは、トロント市立図書館の児童書担当者や、学校図書館、公共図書館のスタッフであり、カナダ・オンタリオ州図書館協会「読書の森」プロジェクトの関係者でもあります。最後に、2017年の選考にあたり、デボラ・ピアソンとシャロン・モイネスほか、トロント市立図書館のたくさんのスタッフに深く感謝します。

2017年1月/トロントおよびバーゼルにて

レイ・トゥリーナ
(IBBYバリアフリー児童図書主任司書)

エリザベス・ペイジ
(IBBY事務局長)

このカタログの使い方

■どのように使えるでしょうか？

このカタログに紹介されている本を読めば、誰もが似たような経験をし、同じように感じ、同じような必要性があるのだということを知ることができます。決してひとりぼっちではないのです。また、まったく知らなかった世界の存在も知ることになるでしょう。セラピストや学校の先生や親にとっては、これらの本を、アイデアの発想や議論のきっかけとして利用することができるでしょう。

■十代の気持ちをひきつけるには？

多くの十代の若者は、知らない世界に飛びこんで探検するような、早い展開の物語に興味をそそられます。特に若い人たちは、肉体的挑戦を通して仮想現実やサバイバルを想像することが好きです。本当の自分を発見する、よりよい方法とはどんなことでしょうか？

No.31『ふたりでひとり、ひとりでふたり』(P. 23)

No.32『恵まれない』(P. 23)

■さわる絵本を作るための新しいアイデア

布や、手ざわりが独特な材料で作った「さわる本」は、子どもにも大人にも人気があります。本をさわって感触を確かめたいくなるのは、誰もが持っている世界に共通する願望なのです。見えない子どもや見えにくい子どもにとっては、さわれる絵があることで、文章で書かれている以上の経験が可能になります。

さわる絵本は、物語がより身近に感じられるため、発達に遅れのある子どもにも有用です。特別支援教育にたずさわる教師は、それぞれの子どもに合わせて本に手を加える必要が頻繁にあります。特別な配慮を必要とする子どものために制作された図書を紹介するコーナーでは、本に加える工夫のヒントを発見できるかもしれません。

No. 4『布の絵本 こんこんくしゃんのうた』(P. 8)

No. 7『めんどりのお話』(P. 9)

生まれつき目の見えない子どもは、言葉に視覚イメージがありません。そういった子どもたちは、耳で聞いたり、においをかいだり、味わったり、さわったりすることで世界を知ることのできる本が必要です。触感を利用した動物の本を作ることはそれほど難しいことはありません。しかしそれだけでなく、子どもたちの経験と関連する要素を加えていく必要があります。

No.10『まるまるまるのほん』(P. 11)

■自分の居場所

子どもや若者にとって、本の中では自分が主要人物になったつもりで感情移入できることが大切です。本の中で自分自身を認識することは、自分の居場所があるコミュニティを見つけることです。それがかけがえのない自分という存在の確認になっていくのです。

No. 43『ウマ、ウマ、トラ、トラ』(P. 29)

No. 46『わたしたちがつくる、わたしたちの物語』(P.30)

No. 50『だめ!』(P. 32)

■読書が得意ではない子どもたちに

グラフィック・ノベルは、文章と同じくらいに絵が重要な役割を担っており、物語を視覚的に訴えます。言語を習得中の子どもや、読むのが困難な子どもだけでなく、母語以外の言葉を勉強している人も楽しめます。つまり、あらゆる人にとって読みやすい形式の本でもあるのです。

No. 2『スーパーヒーローたちの老人ホーム』(P. 7)

No. 28『耳が聞こえないウサギのヒーロー』(P.21)

■文字がない本

言葉に困難のある人や、絵から物語を想像する必要のある人にとって、文字のない絵本は、絵を「読む」本。だれもが読みやすい本です。IBBYのウェブサイトにある、「サイレント・ブックス・プロジェクト」のリストもぜひご活用ください。(www.ibby.org)

No. 19『おはなをあげる』(P. 16)

No. 24『まえあと』(P. 18)

■難しい話題を取り上げる方法のひとつとして

文字のほとんどない、特に子ども向けのノンフィクション絵本は、読者が物語にかくされたテーマに踏み込んだり、議論したりすることへのひとつのステップを提供します。登場人物の立場に立ち、自分がその状況に共感できるかなどを考えることができます。さらに、これらの本は、難しい話題や若い人たちが話題にしにくいような内容について、親や教

師にとっては、いっしょに考えたり話し合ったりする機会を提供できるのです。

No. 18『恋ちゃんはじめての看取り

——おおばあちゃんの死と向きあう』(P. 15)

■インクルージョンや障害に対する理解のために

IBBYコレクションが所蔵されているノースヨーク中央図書館の児童書コーナーには、多くの障害に関心のある教師や家族が訪れます。自分たちとは異なる世界の「窓」を見せるため、幼児や子ども、十代の子たちに、障害のある子どもたちの本を読ませたいと希望してやってきます。写真や物語に登場する障害のある子どもたちが表現する前向きなイメージは、人はみな異なる能力を持っていることを教えてくれます。違っていることよりも、自分たちと同じであること、ともに生きることに焦点を当てていけば、自分とは違うのだと偏見を持ったり、いじめへの気持ちはおのずと減っていくでしょう。

No. 22『マリアムのレバノン・ピザ』(P. 17)

No. 34『少年と海』(P. 24)

No. 38『上を見て!』(P. 26)